

トモエ肥連全関東東海地区拡販推進部会 in 浜松

7月2～3日、静岡県浜松市にてトモエ肥連全関東東海地区拡販推進部会の現地研修会が行われた。トモエ肥連会員店14店26名、事務局、エムシー・フアーティコム㈱、当社合わせて合計37名の参加を得た。この拡販推進部会は賛助メーカーの協力を得てトモエ肥連の会員が持ち回りで現地研修会を企画しており、今回は静岡県袋井市の豊田肥料㈱様の設営により研修会が開催された。浜松市は中山間地域から沿岸部までのそれぞれの地域で、特徴的な地形と地質・豊富な日照量・流通の好立地を生かし、約170種類もの多種多様な農産物が生産されている。現地視察では浜松市内の「ナス・茶・バレイショ」圃場を視察することができた。



①ナス圃場

初めにトモエ化成の代表銘柄である「肥実効」の試験を行っているナス圃場を見学した（写真①参照）。あいにく近頃の天候不良・水捌けの悪さから対照区・試験区の違いはみられなかった。ナスは肥料喰いで元肥・追肥でしっかりと肥料を入れる必要がある作物である。長肥効である「肥実効」の効果を、生育を通してみたいところである。

次に茶圃場を見学した。静岡県といえばお茶、お茶といえば静岡のイメージが強く、現に静岡県は全国の栽培面積1位である。しかし、同じ静岡県内でも浜松産の茶は掛川産のものに比べてネームバリューがないことから成分が重要視される。緑茶成分のうち、全窒素は緑茶の官能審査結果と高い正の相関があり、品質の良い茶には全窒素が多く含まれることから品質評価上の重要な指標となっている。生産者様より「トモエの肥料や微量元素肥料をしっかりと入れることで茶の色味が良く、パツと見の色が好評となり、全窒素も高い数値であった。」とのコメントを頂き、品質向上に大きく貢献していることが伺えた。

最後に長年トモエ化成を愛用されているバレイショ圃場を見学した。作付けされていたのは静岡県西部の赤土で栽培される「三方原馬鈴薯」という高級ブランドジャガイモで、皮が薄く、独特の白い肌が特徴。「長期肥効かつ流失の少ないトモエ化成は50年以上使用していても飽きが来ず、連作となってもトモエ化成が土を痛めないことを強く感じている。」とのこと。また、微量元素肥料の有無によって収穫後のイモの大きさが顕著に異なっていた（写真②参照）。



②左側：微量元素肥料無し 右側：微量元素肥料を施用

圃場で頂いたフライドポテトは程よい甘みのほくほくとした柔らかな食感であり、小腹が空いていた参加者一同は舌鼓を打った。

どの生産者様も豊田肥料㈱様、そしてトモエシリーズと長年二人三脚でやってきたことが伺えた。今回設営にご尽力頂きました事務局、メーカー関係者並びに豊田肥料㈱様、生産者の皆様に書面を通じて厚く御礼申し上げます。

～未来の農業を訪ねて（後編）～

新規事業開発室では未来の農業の形を求めて農業生産者の皆様と様々な取り組みを進めています。今回は4月10日発行の記事「環境に配慮した持続可能な農業生産手法としてのオーガニック米（有機JAS米）」の後編をご紹介します。

2021年に美瑛町農業協同組合様と三菱商事株式会社を主としてスタートした当プロジェクトはMCグループ関係各社がメンバーとして集い、今年2024年で4年目を迎えています。当社は栽培技術・肥料関連を担当し、2024年度は試験栽培面積を2.4ヘクタールへ拡大して各種試験を実施しています。当初、有機JAS米の生産による地域ブランドへの貢献を目指したプロジェクトは栽培上の課題、品種選択などの試験に続き、環境に配慮した持続可能な食料システムとして「みどりの食料システム戦略」の実装を含めた多様な試験を実施して参りました。有機JASに適合した有機農産技術（有機JAS米）は、化学合成農薬や化学肥料を使用しない安心安全な農産物生産と、環境に配慮した生産手法として導入されており、みどりの食料システム戦略にとっても親和性が高い農業生産手法と考えています。ただ、安定生産には課題を抱えており、その解決には個々の農業生産者が対処する場面が見られました。そこで、本プロジェクトでは農業協同組合様、農業改良普及センター様のご支援をいただき、MCグループのネットワークを通じて各種の施策・試験を重ねてきました。

これまでの取り組みとして、冷涼な気象条件の北海道に有効な有機JAS対応肥料の開発と課題の把握、その解決手法の検討。環境に配慮した施策の導入。環境に配慮した技術の有機JAS生産課題解決への応用など多様な視点から試験を進めています。

一例ですが、水稻栽培に該当するカーボンクレジット（J-クレジット）として、水稻栽培における中干期間の延長を、2023年よりバイオ炭の農地施用の試験を本年より実施しています。水稻栽培における中干期間の延長では、試験地での肥効出現の遅れによる水稻生育の遅延への対策技術として効果が確認されました。当地ではこれまで中干を実施しない、または短期間の実施でしたが、有機JASに欠かせない技術として中干が導入され、それに伴ってJ-クレジットを取得するという相乗効果を得ることができています。取り組み案件はこれにとどまらず有機JAS生産コストの抑制、農産物品質の向上などを環境に配慮した技術の導入により実現するため今後も邁進する所存です。

先日、プロジェクトの有機JAS米生産技術を用いて令和六年度新嘗祭献穀圃場が設けられました。写真は古式に則った式典と御田植祭の様子になります。

なお、ここまでご紹介させて頂きました内容は北海道での試験事例となります。試験地以外では同様の結果を得られない可能性がありますのでご了承くださいませ。最後に、取材させていただきました美瑛オーガニック米の生産者様、プロジェクトメンバーの皆様に紙面をお借りしまして御礼を申し上げます。（新規事業開発室）



令和六年新嘗祭献穀圃場御田植祭

暑さが厳しくなってきたので、旬の野菜や果物、お肉などガッツリ食べて乗り越えていきたいですね。

編集事務局：田口、山内

電話：03-5275-5511／E-mail：macjournal@mcagri.co.jp

URL <http://www.mcagri.jp>